心のヒーロー

刈羽郡病院整形外科　平成４(1992)年６月－平成５(1993)年３月　駒谷隆雄先生

藤　村　健　夫

侍JAPANがWBCで優勝したこの春、一流野球選手たちの『野球少年の心』を感じて熱くなりました。

＜筆者の記憶＞

少年時代、野球が大好きで、エンジ色のドイツ書体 K（カー）の入ったダサかっこいいユニフォームの柏崎高校野球部(以下、柏高はっこう)の応援によく行っていた。

昭和53(1978)年夏、甲子園を目指す新潟県予選一回戦、柏崎高校 - 高田工業の試合は、現在の県立アクアパークの位置にあった柏崎市民球場で行われた。この試合も少年藤村はスタンドで応援していた。駒谷投手がブルペンで気迫いっぱいリリーフ準備をしているすぐ横で観戦していた。その年の柏高野球部は左腕Ｓ投手と右アンダースローの速球派　駒谷投手（背番号１）のリレーで試合を作っていた。当時の高校野球は、エース投手が肩肘を故障しながら完投・連投することが美徳とされていたので、今考えれば、投手分業制・時代の最先端の野球だった。試合は０－２で惜敗したが、翌春、柏高のエースが医学部に合格したというニュースは、地元野球界の大きな話題になった。

私が柏崎第二中学３年生になり、生徒会センターで、昔の資料を読んでいると、昭和50(1975)年度、二中生徒会むつみ町は、生徒会長・Mさん(新潟県庁)、副会長・駒谷隆雄先生、生活安全局長・中澤俊郎先生(中沢消化器科内科医院)の執行部体制で、野球部は１番サード（主将）中澤先生、４番ピッチャー駒谷先生のオーダーであったことを知った。

私が柏高野球部１年生の夏休み、駒谷投手は、山形大学医学部野球部のユニフォームを着て、颯爽とグラウンドに登場した。新潟県高校野球ＯＢ大会に出場するための肩慣らしにいらっしゃったのだった。私は、キャッチボールのお相手をさせていただいたが、この時、「駒谷さんの高校3年夏のピッチング、スタンドで応援してました！」って言えばよかった、と今でも後悔している。

＜中澤俊郎先生の語り　中学時代の駒谷投手＞

中学１年生の最初の頃はオーバースローだったけれど、秋にはサイド～アンダースローになっていました。シュートが右打者の内角に切れ込んできて、誰も打てなかった。フリーバッティングの時には、私なんか、かすりもしなかったですよ。私が試合中に雰囲気を和ませるために、「駒谷、投げて打ってお前すごいな。」と茶化すように言ったら、返事はなく、「お前もしっかり打てよ。」みたいな鋭い眼で返された。本質的に野球に打ち込む姿勢が違っていたように思う。また時に沈思黙考する人だった。ただ、余計な話だが足だけは遅かった。短距離ダッシュでも長距離ランニングでもいつも野球部でビリの方だったように思う。

中学3年の大会は、１回表に味方のエラーで１点取られただけで、駒谷さんは相手をノーヒットに抑えて完投したのに、０－１で負けた。情けない試合だった。二中のグラウンド（現在の比角小学校の場所）で全校応援だったのに。

医学部に入学した後、中学時代の担任の先生には、「中澤は勉強して医学部に行ったけれど、駒谷は勉強も野球も両立させて医学部に行ったんだから、駒谷の方が偉いじゃないか。」って言われました。まあその通りですね。新潟大学の学生時代、同級生の野球部員から、「山形大学に駒谷っていうすごいピッチャーがいる。柏崎出身なんだけど知ってる？」って聞かれたことがありますよ。

＜久我則夫さん(元柏高野球部捕手＆主将)の語り　高校時代の駒谷投手＞

無口で飄飄としている人だった。雰囲気が大人びていて『じいさん』とあだ名されていた。駒谷君は最初から医学部を目指していたようだ。

柏高野球部伝統の番神堂往復ランニングでは、私は主将として先頭を走っていたのでわからなかったけれど、駒谷君とＳ君は、往路の途中で抜け出し、休憩して、復路で再合流していたらしい。投手分業制なんてかっこいいものではなく、二人とも完投する体力がないから、半分ずつ投げていたんじゃないかな(大爆笑)。

その代によってチームカラーは違うと思うけれど、自分たちの時は、一学年上がいつも県大会ベスト４、ベスト８に入る強いチームで、監督も本気で甲子園を目指していた。それが果たせず、新チームを作った時は、監督も燃え尽きちゃって練習に来なくなっちゃった。目指せ甲子園、と言いながら、本気で練習したのは７月上旬からだったなぁ(大爆笑)。夏の大会、高田工業戦は１安打しか打てず０－２で負けた。危うくノーヒットノーランをやられるところだった。

社会人になってからも、一緒にゴルフに行ったり、前畑先生の奥さんも同級生でね、３人で仲良くやっていた。そういえば、明日から米国留学に行くという日に突然電話してきて「飲みに行こう。」って誘われ一緒に食事したなぁ。最後は、カラオケで岡村孝子『夢をあきらめないで』を熱唱していた。

＜石井卓先生・横田文彦先生の語り　刈羽郡病院時代の駒谷先生＞

手術はなんでも器用にこなしていた。仕事も一所懸命、遊びも一所懸命の人だった。飲み会の途中で必ず30分くらい眠って、そこから起きてからが元気な人だった。とげとげしたところは全くなく、人当たりの穏やかな人だった。

＜心のヒーロー　駒谷隆雄投手＞

駒谷投手は、中学３年時も高校３年時も援護０点で勝てず、打てないチームの背番号1番として力投していた、ということを知りました。まるで作新学院時代の江川卓投手のようです。

駒谷投手の父上正雄氏（柏高野球部OB）からは、「中学時代、身体の回転がサイドスロー向きだと思ったので、私が、サイド～アンダースローで投げるようにアドバイスした。」とお聞きしました。巨人・斎藤雅樹投手は、ドラフト1位入団ながら伸び悩んでいる時に、藤田元司監督がサイドスローを指導して成功しました。それを彷彿とさせるエピソードです。

石井先生から、新潟大学医学部整形外科教室編『駒谷隆雄先生を偲んで』を貸していただきました。38歳で亡くなった一医局員に対して、追悼文集が編まれたこと、多くの人が心を込めて寄稿していることが、駒谷先生の人柄を表しています。

私は、駒谷投手、駒谷先生とお話ししたことは１回もありません。甲子園は遠過ぎて現実的目標とはならない高校時代、非合理的選択であることを自覚しながら、それでもあえて野球をやった『野球少年の心』を語り合いたかったです。私の人生観、野球観、そして医療観を揺さぶるなにかを与えてくださったのではないか、、、と、ずっと思っています。

＜謝辞＞

久我則夫さん（アルトラベックス）、中澤俊郎先生、石井卓先生、横田文彦先生に、貴重なお時間をいただき取材させていただきました。ありがとうございました。